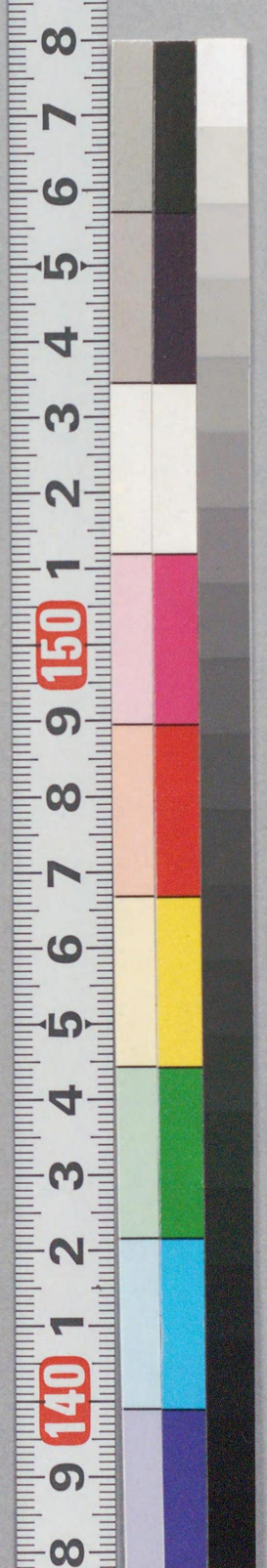
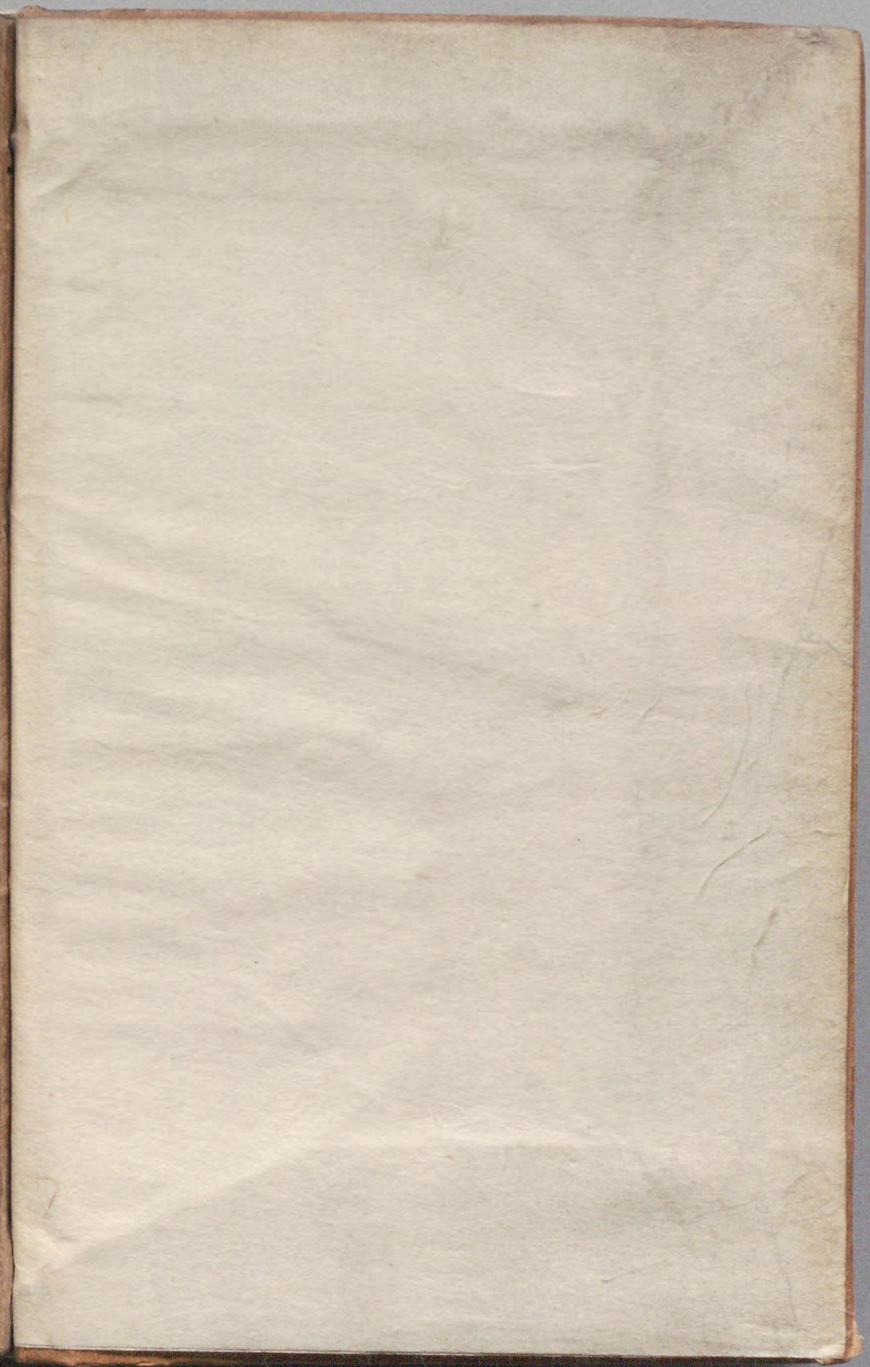
国立国会図書館　　春の寿 208-74



ガラス使用

208
74



国立国会図書館　　春の寿 208-74

ガラス使用

曲亭馬琴
歌川國芳

村田

看序

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

無為有(レ)悪假為(レ)真乃承(レ)謂
癡人面前説(レ)夢也嗚呼誰何
賓易(レ)主筆墨滋戯者
有(レ)年於(レ)此矣書(レ)畢遂記(二)舊語(一)
登(二)録新聞(一)聊撫(二)女子軒(一)

嚮之清尚編可(レ)以資(二)延席(一)之
噴飯之可(レ)笑破顔(二)咲(一)耳
也書成揮(レ)架偶(二)插(一)書架(一)
神之所(レ)在火(レ)櫻自書数行
於簡端

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

白梅や
夜ハ
あけぼの
星の数
羅文

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

三両の金と
仁義も
とんでやう
師れのこまく
こまる
門人
よろこんだ

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

一 凡談者小巧拙れべ。又聽者の工拙あり。話と聽と二ツ揃ふ雅一と云べし初學と雖も最終一。若し初學と雖も聽人の粗漏の罪ありてば。延喜子の書下手と夫鳥銃の的と外して隣の者迄責のまろ。噺銃の罪ありてば。放りの拙なりてば。名鉄砲のとふ一下よりいふべし

一 腐儒

本儒理学の糟粕を食て愚癡偏古の一腐儒あり。膠小漢土小生れざることを歎こと。平生人と話ふるふも。漢でふ個樣唐土でふかふうとでふ事ばかりの事のみ称歎一れど。門人もその意をとうとく。受業をうるめと

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

ふうとへ。まして時節ふうとへ。右の
ごとくの寒士ありて。年暖あれども身邊
安く。世皆ふるまひ酒も口腹餓さう。つま
まもろ菜とゝのへて糧とすべし。人綽綽
として白兎先生と與倣せう。ある時門人先生の
胎とゝるふ。擬中飯をくふてふ雪菜
菜ありしべ。門人大ふ菜そ。孔子も疏食
と含び水と飲脫と曲て枕とす。樂亦其ほ

ふあうとへ字びしーとゞ。いうこの聖人雪花
菜と含ーとと雪ごど。先生の高論うけ
まつたーこつれべ。先生點く步うあづき。香
不侈が云ふ菜と好むことさのく引ふ細
なの。俗豆腐の精とのて雪花菜といふ
又數とゝ。數へ唐ーよる通ひくゆーん。
慳ふ漢士の操と含んそ。數とそぶ
と。脩脛く的つれしべ。門人大ふ威下へ

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

先生の事とうひの老實八十餘歳
あり。さてのまゝ。今ゝ
唐らひ。もろこしといひ。その
さんとうひけまべ。先生け
香花菓木と玉蜀のこ
種物出まて。起居も
先生しづ二人ある
不幸ありて疾癖と患ひ今ゝ吾佐教育

事もわすれバ。今まて
て秘蔵とせしこの人。
ふまつりとりそ一個の
出。是ハ異国のつぐ
かゝる秘法也。萬
各位遠方あるべしと
感激とらぐやう。先生

孝こそ忘ようぞ。是までに秘ぞ
もれべきあらざめて舞
ようぞ。子母の繰車。
かくひ者ある。重宝ぞ
葛籠の蓋と。
かくぐらでもあらぢ。

○鼓人

むし儀屋衣太ふとらぢのわり。當小兒婢

ぢらんとぢらぐ。もぢもぢ
ある日漱田の粉とぢりぢり
と江一個の漢子眠居ぢふ。かぢらぐある砂の
の眼蜂の鬚。漫男墨のごとく黒くて鬼
小仰ぢう。鳥起して行者ぞと云へぐ。そのの對
て我へ海中の鼓人ぢり八大龍王ぶつくてぐ
宮の小更ぢり」ぐ。ぢぢら羅あぢく龍まと
所放ぢ。今漂泊ぢてぢぢぢ。

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

あるれ一扁の芝恋くとるく救ひ
よと含て教りれべ。爰やらもて得おぼ
こひり逐小銭人を
学び芸とふ出ごろうの泉水のうえがその
うちへ〳〵参かさり。弟説その秋七月
のとき日」が爰をこと二井寺の女人湯と兄福
小行ようふ
女。ぐい二人ろうと

うこと白梨て名拉なるおりけて。
雪こと郭ひ。言倍ハ普鳥の。柿の実仕へ風情の礼ハ
爰を弟一番ようの。郎平勿ち春と生ど。通
とつけて行てこと」ば。八早漱あろうなうげ
ある廬とひとひく。母子二口ろうさればと密み
今なの芝塩小便てそのこれとる名乗るふ。渠元
より封と撰こそ婦ど。弟児の名と縁名
とくバ呂のぞむろへ萬顆の明ふと廻酬

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

ふさふる人のもてはやし。婿入のあつかひ。嫁入の取こしも。万事の用意手まへ。仮令元と成りて千金を積むとも。万事の明玉。いつぐ客昂ありやうあるべし。納所につぶ相果病となり。枕もさだまらずにあがくれば。そく医師とやらをまねて容子を尋ぬる。医師脈を診て大きに驚き。難症なり。速に送べし。相果病人活ず。むく御郷王伯典ばかり病ひ膏肓に入。空しくなりぬと。君の御耳にも達しぬ。

つくかへりける。却説前方のかの家あるじ。敵人の主人の疾おもーーときて。益病枕もそばだち。着病となりぬ。前方の妻我夫のその思ふの嫁よろこぶ。彼と中よくおぐり。そくるかひつぶ病日ごとにおもる。年来の奉公人なれば。旦暮ともなく。亡後の追善をも営ぬ。実にかの死ぬるとかねて聞ける。

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

ハ
の言と雖ども夫人注射の
ゞス血の液。薙ぐこと疾せ
て。粒ぐふ様ことあるの
と。袂ものけて岸板と
ア。殺人ろうえでその
アラー事も説話万枝の
字ふとことあーず。まの
づーふ。今度ども。海ゞ液液
ろとり巳ぬ。吾敢

板小枝ぜう。光ぐ狐ろ
ふ。海ワ弱小今了び哭
らさぐことた。のめば殺人
書とろまハどや。海中ふ殺人
ろるる。かる一寄まりと
ぜう狐ろぐあーされバ一様の数いぞろう
ワ。海ワ弱小今了び哭て後川の賢忠え
書とろまハどや。海中ふ殺人不肖。君父の
ろるる。かる一寄まりと液液
ぜう狐ろぐあーされバ一様の数いぞろう
かの船夜の涼旅と話と狐
きさ。ふ的仏うあめ
ろとあさず

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

もうれんも大悲のあるべきの。風巻とあるかぐらざよをばうたふ一つの通風事。明旦酒殻を掬くぬ田の稚かやでそうふ海よ眺るとぶ。すこと。そこ金魚のあつまる事。しばく。とつりれば。夜ふけ大きさ小欽び平旦酒肉と勢家。田の稚のこと事にて。殺人とこゝ匂ひ。海よと。脱ちと殺人至とめげ。く寄の渓とまろが。煙波洞没とそ。ぐ家らつくふるわる。嘩

あつくの約約やとゆ魚あつふ菊のごとく。法然として。さび史物が。紅浅おらて藤く。如花あて煙とあつ。夜ふけ小殻小方那よ気ふうかふ。教へとるふ殻小方那よ気ふうかふ。滝と赤煙表起て。復雲氣攘珊瑚高とも。ぐう。名楽ふまりかまあれば。殺人擁て。旺。腾有ぐあ約ふ事小青もあつて約ふ。ありとうれとそと。老ふま案の高ふ。

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

轉〻うつゞ。なほ其〻ことの
り。染もそめずかうれば。
顎の鬚〻ぢ〻へ。夫婦と
百姓の嫁と酌よのそれ
母子が世業ハ何でもらく
と。廓のうりと私のぞけ
糖

○夜行翁

歳年辛苦得従容。力盡筋疲白頭翁。
情炉油尽黒夜家中従ふ置放ち。と。堰翁の
実〻も宮ゐるふつり〻と詩のこゝろをふ。せり
一個の老爺ゐり。老婆ハ門へ汲布もそ臣
富の良賈よそ生涯身の脂とをぐつて牛鹿
へつぎ。乳よ灯とよりそ炉
倹ふして。吾一代ハ撫得て。今ハ大家のそれと
ふにぬも。万つゝうと終ハらせとの

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

なく。旦そくまでせきあきづめ。這く人が左右火のえが肝ん燈中の灰掻もけぶろて厄つきこめて前よりやいりのみど必くおくまいぞ。天水桶が氷さう。毎朝水と汲ころと小厨と瞬きハせバ。主管も清早うこ。堂下の效と掃せ水溜の水とるれバ。夜前の寒で氷ざうつめその右手の話方の波ふよ彷彿さう。左右ちそせりく歩摔のそこで氷と汲出て水とこころへ

主翁尚くこと廊前と丹まりう。氷の碎てあるとうけ。員怪眼と瞬。黒將の下小猛車ふ。らうこと誠ふこふ。主管陣ふうて人と仕の道とまず。右まで那廂這廂小。火をあいあと妄乱ーておくれ。眼ひべしくと懐まバ。愛更て不解。言老家。那首小火をあいりもそず手をれが厨よ通ぬこと今ふ。摔と氷小指とさせバ主管ー老家

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

這ハ夜前こゝろ〳〵氷とう〳〵薄さのでござります
甚麼これが火なをやくのでござりまするとうくば
老爺假寐的授掠で。ヲ着〳〵燒石とまち
がへさ

○両婦模魂

むし〳〵氷物よ。安部安麿といふもの家小
八眞蒼として 標致意態いとさくひく一個
の児女とりつけ。名と苗字をうつけ 又郎ぶ

掌中の孫と寵愛ひとしく。ぞく〳〵小四女孔
菊二オの春。母氏のまなびの。
医業のそろうにふく〳〵敎抱
の甦も折も。腱旛枝上の花も救ふのさそ
刑三千年の寿もうぎうありて終ふむう
くなりられバ安麿が嘆きさまぐ〳〵。先法の小馬乃まと
月日関令あく〳〵して。ぞ
くそ。程なく中陰もたちられバ人〳〵の合掌

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

氷入りて。粽ごのこ。菱とりくらべ。遠面神毛濃面施が顔色あらて。蓮飯煮と生ド。秋渡媚送るそのうつくしさ花月の妖も謂べし。これども其そこそこざー直ぬ。横ぶりとりて安摩呂媚とそ。その着帯とうひてぱらん業と手擬ー。唯つらくの歌待ーけるな。安摩も後ふらけことと知りて。意ふ悟うるべく了得神ぞろふぶそて。家と易つびてこそーる

ちろしも鬼女が朝暮拵さんて。泣叫とゝのー志のびと。今且も里中野山ふ遣。遥てその家ふそとそこーるるが。式こぞあるのさ私の日の騒小猛雨うり来り。遊雨せん家もありしぱ。渓流の林ふりけ入く。吹選雨波ふのぶる大地鉄ふ崩て。さちこち穴の中へ落るが。その深と。遂ふ人の声のこふ聞止こそ。城ふりとりれぱ。不今もも来り。その後て安摩とそるのふ手

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

小清りる。安磨ようく個人ところ小三年ごの
小病死ろうし。亡僕世可辛安磨と
倩ろそ。大きに孩さけやくも細傳と釋内ふ
走ろ入く右と告りれバ。安磨呂ぶ父母ろ玉ぶ。
まづはととりて嘆ろる。父ろぶ神ゆうけ。生
死道と夫ふをれバ。ワが児安磨ふまろれてより
十七年。今相見ろの奇事さろ遥ふ室ふ
伴入まバ。さ迎ひもなくなり先妻真菅。

窓ゑよ引き針刺繍ていろ
ようく言残かけんと考
由解祝ーろくその座を立さりけるゆぞ。安ナ
呂更ふ不解。母と玉ふ残ろ
汝ふたゝび妻ふむくたらん凡男子後妻を
娶るぞ。恭妻結髪の情ふ
おろその叶ひぐさとて。母
其ふバ玉ふ苟ふて夫の影ふて先祖をぞなぐ

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

る。猪之吉のてもくうろうろ
呂敷く説話つ。〔毒のる
乱菊。憤小野様せるる
さ菊もち乳のへど駄うと
の今野とて。洲崎婦のの色
含だ。等小嶋島と招て
も称く碑子あり。今さ
ふらへて。句言だ。県がお
孫へさハ孫女。り一方のあ
孫くて。長く宗祝とうが
うあづき。おくバ孫女が成
とこのこころへまねき。教訓
と迫く招き。見の為あり。家の
安土名と同様てび家小
最こころげくまと。母りろ
菊ハ辞さるふことばあく。漫

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

とねど。安店口とうちつれ知るとおり人ハ勿
論雨せ一林のほか来るごとく。芥子の
こうでめて爰のそんさうでまくどぎ
まとりて。ワゴ家の門へ乗つけバまつ番かまよ
先ざらつ内へとうとうとくつくて
湖水の舟がごとく。そのめくさんとまぶ歩ア
呂もつづひく門よりまこバ頭人女乱菊。父のえ
アーところう。且欽び。且恐一ご雛遠よ之

知一が。ほうく八腹おくく落花のごとく。ぱ
と袋八切く。血と流一。りそ六旦大人の看守る
史。往来民より擔され。這様の事ハ珍
しこと。つ家のさんも口やきして。ぱよ危くこそれ
安慶周章双抱も。左やと猴狽まつ。
奥さう後妻棒給くし歩のこ玄。ぶらぶらや五の
新まと石そびごわ擔させて金沢よりなる
のうくめーやとらんぎこと腰よ拵さわげ。奴家

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

八孩児の実の母。二つのまゝ
うち人誘ふも可愛の児や。雨
と泣かるゝときわ。亦妻
呂うく〳〵とつく〳〵ふ。容
れぬも。言語道断八釈
善うれし。さても亡父母の
実の母と教ひく。迷
よ暮ひろう。

の教草ぎりあり。書ハ
安積艮斎。医ハ
子ハ衣服のごと。世の
世と辞くよう多くの
もろ〳〵。その香嗅ん
面やと。かさんごれ
後生あと。

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

中睦〳〵。已ふ十二年の月日を送りぬれば
女らんぎく。ことや十六のまことに
風ありて。信田の森の蜂やく
なりぬ。好事のこと多かる。もろ〳〵ふ
いひろふ八日。依阿義房ふたりをして。ぐ
べ〳〵と告ぬ。園房の親兄まで
の今ふたりて。四人女とまでこそ
て十二年。今ハ児女も人の

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

小郷もうまくく。昔の事ども。夫婦
女児をあつまと恩愛のとる方もの。安
只人かる形状をとるかつけくも。能もく邪
見の報ゆるまゝか。志むう〳〵而吾。かく〳〵の妻
婦となるまでを。まつたくく亡父母のる恩といひ。
まと二つゆき。家妻まの苦ども婦徳のなき
かるまでぬ。なかとぞ今一度あいそはゝ地の
労をいひたく。いまさらよなの〳〵

りやう〳〵避而せ林のはふごのもの
再見るもあるぬと。贊小叢林ふるけ
ゝく。那廂這廂ゝと吟ふ。樹の古木寂寞
として。苔こゝる葛の葉裏。山風ふ翻う
その後小大きなる穴のあるを。こゝふれ
ぜゝと走つゝれバ。穴の四方ふ通ゝり
新き撥をゝするハ。不解とゝうて憤ぐ
乃まバ。祢その筆とゝ入くく。霊櫛の穴

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

小ぞん五用。

あやめぐさのなのさだれ 菖蒲草擔五月雨	絵いつまよみ本出来 歌川国芳画
秋月もの色おちさめあぢう 奇談 案風邑雨物語	円 廻り出来
かけとりさんぢつ	出来 柳亭種彦作 歌川国丸画
	歌川国直画

宝舟さゝきに続ぐ下女感じと川柳点乃め
ちるかちの僕ん書をろうまん減ぐくいろく夫先生の磨才へいのぐゆこ者
ぞん〳〵さゝぐべ花二度の猫よ
古た名を赤新玉の春ことも先生の
高名ゆよれが本製表子が利欲をゆくかぐず。
鳴弁盛ちるの曲亭先生大なるあ

国立国会図書館　春の寿 208-74

ガラス使用

208
74

4/7/59

馬琴子の名とゞまるになん（ゝ）ゝ（ゝ）ゝ（ゝ）ゝ

208
74

国立国会図書館　　春の寿 208-74

ガラス使用

国立国会図書館　　春の寿 208-74

ガラス使用